

人との関わりと文化への体験的理解を深める 小学校外国語活動の授業研究

—Q-U との関連を視点に取り入れた授業構想をもとに—

瀬川 明臣

Akiomi SEGAWA

Research on Teaching Foreign Language Activities at the Elementary School to Deepen Student Relationships and Cultural Understanding through Experiential Learning
—Based on the Teaching Framework from Q-U research—

【 要 旨 】

本研究は、外国語活動の授業研究をQ-Uとの関連を視点に取り入れて行うことを目的とする。小学校外国語活動は、聞く・話すの主たる活動であるため、友だち同士の関わり合いが多くなる。そのため、外国語活動は学級運営と繋がりがあると考える。直山（2013）は外国語活動の指導のあり方として深い児童理解が欠かせないと述べている。そこで、学級運営を児童個々の状態や学級集団の状態が把握できるQ-U（河村，2014）を活用して捉え、Q-Uとの関連を視点に取り入れた人との関わりと文化への体験的理解を深める外国語活動の授業研究を進めた。学習効果の観点から授業前後の児童の意識調査を比較し、外国語活動に関する意識とQ-Uとの関連性を調査した。結果、授業後に児童の外国語活動に関する意識が肯定的に変化したことがわかった。さらに、外国語活動とQ-Uの間には有意な相関が認められた。また、Q-Uとの関連を視点に取り入れた今回の授業は、学級集団を形成する一助となることも示唆された。

【キーワード：小学校外国語活動，Q-U，人との関わり，文化への体験的理解】

I 研究の目的

1 テーマ設定の理由

小学校外国語活動が平成23年度より小学校5、6年生に週1時間の必修化となったが、小学校における外国語教育については、既に昭和60年代からの課題であった（文部科学省，2008）。時代とともに国際化が進み、国際理解教育の充実とコミュニケーション能力の育成という視点から提言が行われていたことより、現在の小学校外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コ

ミュニケーション能力の素地を養う。」（文部科学省，2008，p.7）となっている。小学校外国語活動の目標が、中学校・高校の外国語教育の目標と大きく違う点は、言語や文化についての体験的な理解と、音声や表現への親しみ、そしてコミュニケーション能力の素地を養うという3点である。表1は、小学校・中学校・高校の指導要領の内容をまとめたものである。内容を大きく4つの領域に分け、それぞれの文言を抜き出して筆者が作成した。その中でも、小中高の連続した関連性を考慮すると、コミュニケーション能力の素地を養うことは、小学校の重要な役割であると考えられる。小学校外国語活動は、わずか週に1時間の授業で

あるが、中学校と高校の土台作りという重要な役割を担っているのである。

表 1 学習指導要領の目標の比較

	小学校	中学校	高等学校
言語や文化について	体験的に理解を深める	理解を深める	理解を深める
コミュニケーションへの態度	積極的な態度を育成	積極的な態度を育成	積極的な態度を育成
外国語技能について	音声や基本的な表現に慣れ親しませる	聞くこと・話すこと・読むこと・書くことなど	情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりする
コミュニケーション能力	素地を養う	基礎を養う	能力を養う

本研究における外国語活動の授業構成を行うにあたり「人との関わり」と「文化への体験的理解」を深めることを中心とした。指導要領にも書かれているが、現代の子どもたちは経験不足からか、感情や思いを表現したり受け止めたりする力が乏しいと考える。だからこそ、外国語活動において、意図的に学級集団の中でコミュニケーションの大切さや楽しさを実感させる必要性を感じた。そこで、外国語活動の授業構成を行う際、まず「人との関わり」を深めることを中心とした内容とした。金森（2011）も、人と関わることという側面を無視してことばの教育は成り立たないと述べている。

次に、「文化についての体験的理解」だが、ユネスコでは平和・人権・民主主義のための教育宣言が採択され、行動計画も作成された。このことから、泉（2013）は、国と国とが相互に理解し合うというよりも、国を超えて地球規模で解決すべき課題を考えていこうとする方向に世界は移っているとし、外国語活動で異文化を扱う意義は、「日本と外国の文化を比較させ、相違点や共通点などに気付かせ、相違点の根底にある必然性を理解させることである」（p. 24）と述べている。「文化への体験的理解」は、地球規模で必要とされていると言えるのではないだろうか。以上が、外国語活動の授業構成を行う際に「人との関わり」や「文化への体験的理解」を深めることを中心とした理由である。

次に、外国語活動の授業研究の中に、「Questionnaire-Utilities」（以下、Q-U）の関連

を視点に取り入れた理由を述べる。直山（2013）は外国語活動の指導のあり方として「深い児童理解」が欠かせないと指摘し、技能を身に付けさせることが第一のねらいではなく、コミュニケーションの素地を身につけさせることがねらいであり、子どもが聞きたくなる・言いたくなるような題材のもと、実態に合った活動を設定することが大切であると述べている。

この「深い児童理解」やこれまでに述べた「人との関わり」という言葉から、外国語活動の授業は学級集団を作っていく力とよく似ているのではないかと考えた。そして、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）の「学級運営等の在り方についての調査研究」から、まさに人との関わりや深い児童理解は、学級運営を充実・改善していく内容に類似していることが分かった。この調査研究の中で、学級運営の充実改善の基本的方向が3点記されており、その3点のうちの2点が、「豊かな人間関係の構築」と「児童理解の深化こそ基本」という内容であった。「人との関わり」は「豊かな人間関係の構築」に関係しているであろうし、「深い児童理解」は「児童理解の深化こそ基本」と関係していると思われる。

以上のことから、外国語活動と学級運営との関連性が想起された。しかし、学級運営の状況を目に見える形で捉えることは難しい。そこで、本研究では、全国でも多く実施されているQ-Uを活用して学級運営を捉えることとした。Q-Uとは、児童生徒の学校生活での満足感と意欲、学級集団の状態を調べる質問紙である（河村，2012）。また、Q-Uについて作成者の河村（2004）は、学級集団を効果的な教育集団に育成し、児童一人一人の個性を育てるといふ、学校教育が本来もつ教育機能を発揮するための道具であると述べている。

外国語活動の目標を達成する授業を行うために、Q-Uとの関連を視点に取り入れた授業構想をすることで、内容研究の側面以外からも外国語活動の授業を捉えられる一つの方法になるのではないかと考えた。そのため、「人との関わり」や「文化への体験的理解」を深めることを中心とした授業研究を進める上で、Q-Uとの関連を視点に取り入れるという本研究テーマを設定した。

2 研究の目的と仮説

本研究の目的は、人との関わりと文化への体験

的理解を深めることができる外国語活動の授業研究である。その際に、外国語活動と、児童個々の状態や学級集団の様子が把握できる Q-U との関連を視点に取り入れながら授業実践を行う。人との関わりや文化への体験的理解を深めることができる授業実践を行うことで、外国語活動に関する児童の意識が向上し、それとともに学級集団へも良い影響を与えるのではないかと予想する。従って、今回の授業では、本研究の目的に沿った効果的な単元を現カリキュラムの中から選択し、人との関わり合いを生む活動の作成や、様々な文化を体験的に感じられる内容を工夫する。

まず、質問紙による児童の意識調査を行い、外国語活動に関する意識と Q-U との関連を調査する。このことから、外国語活動と Q-U との関連性を明らかにする。授業の効果を調査するために、授業後にも児童の外国語に関する意識調査と Q-U の再調査（3項目抽出）を行い、授業前後の変化を調べる。肯定的な変化が認められれば、外国語活動の授業構想の際に Q-U との関連性を視点に取り入れることが、児童の外国語活動に関する意識や学級集団に対して好影響を及ぼすと言えるであろう。そして、外国語活動の目標を達成する効果的な授業内容は、学級集団を形成する一助となるか検証していきたい。

II 研究方法

1 調査手順

児童が外国語活動に関してどのような意識を持っているのかを調べるため、質問紙による調査を行った。調査対象は、小学校 5・6 年生である。Q-U は児童が通う小学校で実施されたデータを用いた。次に、人との関わりと文化への体験的理解を深めることができるように外国語活動と Q-U との関連を視点に取り入れながら、授業実践を試みた。対象は小学校 6 年生である。

児童が人との関わりを実践できたかどうか、また文化への体験的理解を深めることができたのかを調査するために、3回の授業後にも質問紙調査を行い、授業前後の項目得点を比較して授業の成果を検討することとした。授業前後の比較項目は、自作項目と Q-U 項目の追試である。

また、時系列にした研究の流れを表 2 に示す。

表 2 本研究の流れ

6月3日	Q-Uテスト
6月27日	外国語活動に関する意識調査（事前）
6月30日	授業実践1時間目
7月8日	授業実践2時間目
7月14日	授業実践3時間目
7月15～18日	外国語活動に関する意識調査（事後）

2 意識調査

児童が外国語活動に対してどのような意識を持っているのかを調査するため、外国語活動に関するアンケートを作成した（図 1）。はじめに、児童が外国語活動の授業をどのように捉えているかを尋ねる質問を 4 項目作成し、続いて、直山（2014）の調査を参考に、外国語活動の中でどのような活動を児童は楽しいと感じているのかを尋ねる質問を 6 項目作成した。

図 1 外国語活動に関するアンケートの一部（質問紙）

具体的な項目は以下の通りである。

・児童が外国語活動の授業をどのように捉えているかを尋ねる項目

- ① 外国語活動が好きです。（理由を自由記述で記入）
- ② 外国語活動の授業の内容がよくわかります。
- ③ 「伝えたい」、「分かってほしい」という気持ちで取り組んでいます。
- ④ 外国のことに興味があります。

4 件法で評定（4：あてはまる 3：少しあてはまる 2：ややあてはまらない 1：あてはまらない）

・外国語活動の授業のどのような活動を児童は楽しいと感じているのかを尋ねる項目

- ア 英語のゲームをすること
- イ 日本語と英語の違いを知ること
- ウ 英語で歌ったりチャンツを言ったりすること
- エ 英語で会話をすること（友だちと、先生と、外国人の先生と）

オ 英語で友だちや先生などの人の意見を聞くこと
 カ 英語で自分のことや意見を言うこと
 4 件法で評定 (4: 楽しい 3: やや楽しい
 2: あまり楽しくない 1: 楽しくない)

質問紙調査は小学校 2 校に依頼し、A 小学校 (一般的な学校) と B 小学校 (外国語活動を研究主体におく小学校) の 5・6 年生に実施した。また、本研究の授業実践の効果を調査するため、授業後にも外国語活動に関する意識調査を行った。授業の直接の効果を問うため、児童が外国語活動の授業をどのように捉えているか尋ねる項目に、「これまでよりも、外国に興味をもつようになった。」、「これまでよりも、友だちとの関わり合いを持つと思うようになった。」という 2 項目と、Q-U の追試項目として「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き」、「失敗したときクラスの人が励ましてくれることがある」、「クラスの中に気持ちをわかってくれる人がある」の 3 項目を追加した。6 項目の質問内容と評定方法は、授業前に行ったものと同一である。

Ⅲ 授業内容

1 単元構想

人との関わりと文化への体験的理解を深めることを中心に、A 小学校 6 年生において行った授業実践について述べる。A 小学校 6 年生は、2 学級あり、どちらの学級も落ち着いて授業に取り組むことができ、真面目な集団である。反面、積極性に欠ける部分も見られ、学級担任は、児童が前に立って活動する場面を意識して設けている。

授業単元は Hi, friends! 2 Lesson 5 Let's go to Italy を基本とする。この単元を取り上げた理由は、友だち同士の関わり合いを多く設定できる内容であったことと、様々な国の世界遺産などが紹介されていることから、本研究の中心に据えた、人との関わりと文化への体験的理解を深めることを実践するのに適当であったためである。単元目標は「自分の思いがはっきり伝わるようにおすすめの国について発表したり、友だちの発表を積極的に聞いたりしようとする」、「行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ」、「世界には様々な国や文化があり、生活があることに気付く」である。人との関わりや文化への体験的理解を深めることを目標に、授業内容を

作成した。表 3 は、筆者が実践した Hi, friends! 2 Lesson 5 の単元計画である。

表 3 Hi, friends! 2 Lesson 5 の単元計画

時	目標と主な活動	評価の重点			評価規準 【観点】<方法>
		コ	慣	気	
1	<ul style="list-style-type: none"> ○世界には様々な国があり様々な文化があることに気付く。 ・国旗あてクイズ ・Hi, friends! 1 Lesson 1 の動画を見ていろいろな国を思い出す。 ・国名の言い方を知る。 ・世界遺産ゲーム ・Pointing Game 			○	建物や自然、食べ物など様々な国の特色を知り、世界には様々な国があり様々な文化があることに気付いている。 【気】 <発言、振り返りカード>
2	<ul style="list-style-type: none"> ○ゲームやチャンツをとおして国名の言い方や、行きたい国を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・Let's Chant ・World Sugoroku 			○	国名や行きたい国を尋ねたり答えたりする表現を聞いたり言ったりしている。 【慣】<行動観察、振り返りカード>
3	<ul style="list-style-type: none"> ○おすすめの国について、相手が行きたくなるように紹介しようとしたり、聞いたりする。 ・シチュエーション練習 ・自分のおすすめの国を紹介する。 ・友達の紹介を聞いて、行きたくなった国について伝え合う。 	○		○	おすすめの国について、相手が行きたくなるように紹介しようとしたり、聞いたりしている。【コ】 <行動観察、振り返りカード> 世界には様々な国があり様々な文化があることに気付いている。【気】 <相互評価、発言、振り返りカード>

文部科学省が示す指導計画では 4 時間構成となっていたが、本研究では 3 時間構成に組み換えて行った。残りの 1 時間を学級担任が外国語活動の補強に充てることを想定し、内容を充実させながら時間数を少なくできないかと考え、このような構成とした。

2 授業の要点 -Q-U との関連を視点に取り入れた内容も含めて-

(1) 第 1 時の要点

1-1 導入部分での単元全体のゴールの提示

Q-U の「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き」という項目を意識して、単元の最終活動が自分の行きたい国を発言し合うことであると提示し、そのゴールに向かって見通しを持って活動ができるように単元構成を行った。

1-2 既習の Hi, friends! 1 の動画の使用

1 年前に Hi, friends! 1 で使用した教材を再び使うことで、学習の連続性を意識させることを目

的とした。動画の内容は、様々な国の挨拶を各国の母語とともに英語で行っている様子が映されたものである。また、英語も日本語と同様の言語であることを児童に意識づけるねらいもあった。

1-3 ALT・授業者、それぞれの異文化理解につながる実体験の語り

文化への体験的理解を促すため、児童の興味関心を高めようと考えて実践した。海外にあまり馴染みのない児童が多く在籍しており、「海外」や「外国」という言葉に実感が持てない様子であったため、日本も海外であり、日本に住んでいない人から見れば外国であると語った。授業者も海外で失敗した話や開国の方々에게 助けられた話等をした。

1-4 振り返りの時間の確保 -ALTによる英語での評価も含めて-

Q-Uの「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き」という項目を意識して、振り返りの時間を確保し、互いに感想を共有した。また、振り返り時にALTに英語で評価(褒めて)してもらった。英語が分からなくても、名前を言ってもらい褒めてもらっていると、不思議なものだが、児童は内容を「感じる」ようである。自然と拍手が起こったことから、児童が理解していることがわかった(図2)。



図2 ALTに評価してもらっている様子

(2) 第2時の要点

2-1 World Sugorokuの実施

Q-Uの「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き」という項目を意識して、友だち同士で発言しあいながら進めるWorld Sugorokuを作成した。World Sugorokuは授業で学んだチャンツを使いながら行う、すごろくゲームである。一般的なすごろくはスタート、ゴールがあるが、今回のすごろくはスタートもゴールを設定しなかった。勝敗を気にして平常心を保つことが難し

い児童等に配慮したためである。しかし、それによってゲーム性が失われることのないように、導入場面で世界旅行を意識させ、パスポートに入国印が押されるかのごとくワークシートにチェックを入れることで、より多くの国にコマを止めることに興味を持てるようにした。加えて、Q-Uの「失敗したときクラスの人が励ましてくれることがある」の項目を意識し、すぐろくで使用するフレーズ練習の多くをペアで行った。英語での表現なのだから最初からできなくて当たり前だという雰囲気や、分からないところはお互いに聞き合いながら声を掛け合えるようにしたら良いという雰囲気を作るようにした。グループに一枚ずつ渡したすごろく盤の用紙(図3)は、A4を4枚つなげて作成した。児童同士の会話の材料となるよう、中央には世界地図を配置した。

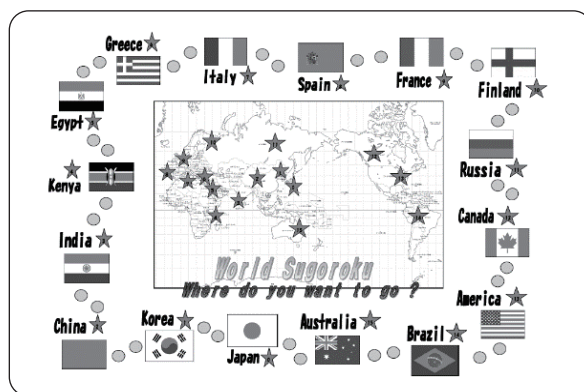


図3 World Sugorokuのすごろく盤の用紙

2-2 アンケートとカード作成

2時間目終了後、児童の行きたい国を尋ねるアンケート調査を行い、児童が行きたい国、その国の世界遺産や名所、食べ物を調査した。思いつかない児童には、行きたい国のみ調査し、世界遺産と食べ物は筆者が協力して児童に提示した。そして、単元の最終活動に設定した、行きたい国の紹介の活動に使用するため、児童が行きたい国の国旗、世界遺産や名所、食べ物の3枚のカードを作成した。

(3) 第3時の要点

3-1 シチュエーション練習

場面を設定して、“Where do you want to go?”を利用したシチュエーション練習を行った。実際に使う場面を想定して使用することで、言葉が児童により近い存在になり、興味や関心もわくと考

えたためである。設定した場面は①道に迷っているおばあさんに優しく尋ねる, ②今度遊びに行く場所を友だちと相談する, ③どこに行きたいかはっきりしない人にイライラしながら言う, である。これは、「自分の気持ちを上手に伝えるためには、声のトーン、顔の表情やジェスチャーなどが重要になってきます。Big Voiceではなく、相手の気持ちになってみる、その場の状況に応じて声の調子を変えてみるなどの指導をしてみましょう。」と金森(2011, p31)が述べていることを参考にした。

3-2 行きたい国の紹介

Q-Uの「クラスの中に気持ちをわかってくれる人がいる」を意識し、相手の話をしっかりと聞きあう雰囲気を作り、相手が聞いてくれる安心感と、話して良かったという達成感を持つことが出来るようにした。学級全体で行う中で、注意して各児童の活動を見守りながら、手本となるやりとりをしている児童の様子を全員と共有し、中間評価を行った。結果、自然とやりとりの後に相手の話に対して拍手をする児童も見られた(図4)。



図4 行きたい国の紹介を仕合う中での拍手と笑顔

IV 結果と考察

1 外国語活動に関する意識調査

A小学校(週1時間の外国語活動を行う一般的な小学校)の5年生57名(男子32名, 女子25名), 6年生45名(男子20名, 女子25名)とB小学校(外国語活動を研究主体におく小学校)の5年生35名(男子19名, 女子16名), 6年生36名(男子17名, 女子19名), 計173名に実施した。

外国語活動の授業をどのように捉えているかを尋ねる質問の中で、「外国語活動が好きです」という項目に「あてはまる」と答えた児童は154名で、全体の89%であった。「ややあてはまる」と答えた15名の児童も含めると、98%となった。このことから、非常に多くの児童が外国語活動を

肯定的に捉えていることがわかった。次に、「伝えたい」、「分かりたい」という気持ちで取り組んでいます。」という項目に「あてはまる」答えた児童は103名で全体の59.5%であった。この項目が、授業前の質問紙調査の項目の中で割合の一番低い項目であった。しかし、一番低い項目でも約6割の児童が肯定的にとらえていることから、多くの児童が外国語活動を前向きにとらえていることがわかった。

学校間の違い、学年間の違い、男女の違いを検討するためt検定を行った。「伝えたい」、「分かりたい」という気持ちで取り組んでいます。」の項目では、一般的な学校<外国語活動を研究主体におく学校($t=-3.24$, $df=171$, $p<0.01$), 5年生<6年生($t=-2.13$, $df=171$, $p<0.05$), 男子<女子($t=-2.53$, $df=171$, $p<0.05$)となり、学校・学年・男女において有意な差が見られた。「伝えたい」、「分かりたい」という言葉から、自分のことだけではなく、相手のことも考えながら学習に取り組んでいることがわかる。これは、学習の深度にも関連するであろう。外国語活動を研究主体におく学校ほど、児童同士のやり取りを含む活動が多く見られたこと、学年が上がるほど友だち同士の関係性を作るスキルも上昇すること、そして、男子よりも女子のほうが一般的に成長が早く、柿・辻河(2008)によると、高学年になると女子の人間関係は男子より複雑化することから、男女での違いが生じたと考えられる。

一方、外国語活動の何を楽しいと捉えているかを尋ねる質問の中で、児童が一番楽しいと思っている活動はゲームであり160名(92.5%)の児童が楽しいと答えた。また、t検定で差を調査したところ「英語で歌ったりチャンツを言ったりすること」の項目では6年生<5年生($t=3.06$, $df=171$, $p<0.01$), 男子<女子($t=-2.10$, $df=171$, $p<0.05$)となり、学年・男女での差がみられた。「英語で会話をする事」の項目では5年生<6年生($t=2.01$, $df=171$, $p<0.05$)となり学年での差が見られた。「英語で友だちや先生などの人の意見を聞くこと」の項目では、男子<女子($t=-2.18$, $df=171$, $p<0.05$)となり男女差が見られた。「日本語と英語の違いを知ること」の項目では、男子<女子($t=-1.92$, $df=171$, $p=0.056$)となり、有意傾向が見られた。学校間に差は見られなかった。

以上のことから、外国語活動に関する意識は、学校間で多少の差があるものの、学年の違い、性別の違いとなるほど差が大きくなるという結果が見られた。学校間の違いよりも、経験の積み重ねによる学年の違い、そして友だちづくりにおいて女子の方が関係性をより早い時期に重要視する傾向にある(國枝・古橋, 2006)というような、性別による違いのほうが外国語活動の意識に影響しているのではないかと思われる。

2 外国語活動に関する意識と Q-U との関連

外国語活動に関する授業前に行った意識調査と Q-U との関連を見るために、相関分析を行った。結果(表 4)、外国語活動に関する意識(授業前)と Q-U との間に相関が見られた($r=.338$, $p<.01$)。このことから本研究の仮説の通り、外国語活動と Q-U との関連性が明らかとなった。

表 4 授業前の外国語活動に関する意識と Q-U との相関

	外国語活動に関する意識	Q-U
Pearson の相関係数	1	.338**
有意確率(両側)		0.002
N	173	81
Pearson の相関係数	.338**	1
有意確率(両側)	0.002	
N	81	81

**、相関係数は 1% 水準で有意(両側)

3 意識調査・Q-U の授業前後の比較から見た授業の成果

今回の授業実践が、児童の外国語活動の意識に与える効果を検証するため、まず、授業後の外国語活動に関する意識調査と授業効果の調査に関する Q-U との関連を見るために相関分析を行った。結果(表 5)、授業前よりも高い相関が見られた($r=.441$, $p<.01$)。

さらに、授業後の相関のほうが高いことを確かめるため Fisher's Z テストを行った($Z=-0.64$, one-tailed, $p<.05$)。結果、授業後の外国語活動に関する意識と授業効果の調査に関する Q-U の相関のほうが高いことがわかった。このことから、外国語活動の授業に、Q-U との関連性を視点に入れることで、両者の結びつきがより強いものになるということが分かった。

表 5 授業後の外国語活動に関する意識と Q-U の相関

	Q-U (授業後)	外国語活動に関する意識 (授業後)
Pearson の相関係数	.441**	1
有意確率(両側)	0.002	
N	45	45
Pearson の相関係数	1	.441**
有意確率(両側)		0.002
N	45	45

**、相関係数は 1% 水準で有意(両側)

次に、本研究での授業の効果を調査するために設定した項目について分析した。人との関わり、文化への体験的理解、それぞれの項目において、授業の前後の差を検討するために t 検定を行った結果、統計学的有意差が見られた項目は少なかったが、全ての項目の平均値は授業前よりも上がっていた。

人との関わりを調査する項目(表 6)に関しては、「クラスの中に気持ちをわかってくれる人がある」という項目の平均値が上がった($t=-2.23$, $df=44$, $p<0.05$)。相手に伝えるためにどのようにすれば良いか、相手に伝えるためにどのような気持ちが大切なのかを、授業の中で活動を通して行った結果が表れたのではないだろうか。また、「普段使っていない言葉で自分の気持ちをうまく伝えられないのは当然なこと。大切なことは、相手に自分の思いを伝えようとする気持ちと、相手が何を伝えようとしているのかをしっかりと聞き取る、受け取る側の気持ちの両方である。」

表 6 「人との関わり」を調査する項目の授業前後の平均値と SD および t 検定の結果

	授業前		授業後		t 値
	M	SD	M	SD	
失敗したときクラスの人が励ましてくれることがある	3.22	0.74	3.29	0.63	0.46
クラスの中に気持ちをわかってくれる人がある	3.29	0.84	3.58	0.54	2.23 *
「伝えたい」、「分かりたい」という気持ちで取り組んでいます	3.51	0.55	3.56	0.55	-0.50
これまでよりも友達との関わり合いを持つようになった	/		3.33	0.63	/

* $p<.05$

(注) 最下部 1 項目は授業後のみの項目のため、平均値と標準偏差のみ示す

ということも、活動を通して繰り返し伝えたことにより、児童の気持ちの中に相手をわかろうとする気持ちが育まれたことから、気持ちをわかってくれる人がいると児童が感じることに繋がったのではないかと考える。

文化への体験的理解を調査する項目（表7）に関しては、「日本語と英語の違いを知ること」（ $t = -2.12$, $df = 44$, $p < .05$ ）という項目の平均値が上がっていた。言葉の「違い」を意識させるために、日本語も英語も「同じ」言語であるということを見出し、児童に認識させた。外国語の存在が児童にとってあまりにも遠すぎると、その違いを知ることを楽しみを見出すことはできないだろうと考えたためである。結果、日本語も英語も「同じ言語」であると児童が認識するようになり、その「違い」を楽しむことができるようになったと考える。

表7 「文化への体験的理解」を調査する項目の授業前後の平均値とSDおよびt検定の結果

	授業前		授業後		t値
	M	SD	M	SD	
授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き	2.80	0.87	2.87	0.84	0.57
外国のことについて知りたいと思います	3.51	0.55	3.71	0.59	-1.93
日本語と英語の違いを知ること	3.31	0.70	3.53	0.59	-2.12 *
これまでよりも、外国に興味をもつようになった	/		3.73	0.49	/

* $p < .05$

注) 最下部1項目は授業後のみの項目のため、平均値と標準偏差のみを示す

また、「外国について知りたいと思います」という項目では、授業後のほうが平均値が高いという有意傾向が見られた（ $t = -1.93$, $df = 44$, $p = 0.06$ ）。毎時間の導入で、担任やALTの実体験を語ることの有用性も考えられる。

次に、授業後のみに行った項目について述べる。まず「これまでよりも友だちとの関わり合いを持つと思うようになった」という項目では平均値3.33、「これまでよりも、外国に興味をもつようになった」という項目では平均値3.73（共に評定4が「とてもそう思う」という結果になった。どちらも高い数値である。このことから、今回の

授業を通して、児童の意識は肯定的な方向へ変化したと考えられる。

本研究で外国語活動との関連の視点として捉えたQ-Uの3項目について、授業前と授業後の差を検討するため、t検定の結果をまとめた（表8）。先述の通り、「クラスの中に気持ちをわかってくれる人がいる」という項目が授業後に有意に平均値が上昇し（ $t = -2.23$, $df = 44$, $p < 0.05$ ）、有意差は見られなかったものの、全ての項目において授業後は平均値が上昇していた。このことから、Q-Uとの関連を視点に取り入れた外国語活動の授業は、Q-Uの項目について好影響を及ぼすことが示唆された。外国語活動の充実が、より良い学級集団作りの一要因になりうることを示していると考えられる。

表8 授業前後のQ-Uの平均値とSDおよびt検定の結果

	授業前		授業後		t値
	M	SD	M	SD	
授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き	2.80	0.87	2.87	0.84	0.57
失敗したときクラスの人を励ましてくれることがある	3.22	0.74	3.29	0.63	0.46
クラスの中に気持ちをわかってくれる人がいる	3.29	0.84	3.58	0.54	2.23 *

* $p < .05$

また、外国語活動の授業で何を楽しいと思っているのかの項目において、授業前と授業後の差を検討するためt検定を行った（表9）。結果、先述の通り「日本語と英語の違いを知ること」を楽しんでいる値が、学習後に高まったことがわかった（ $t = -2.199$, $df = 44$, $p < 0.05$ ）。また、「英語のゲームをすること」という項目の平均値は変化しなかったが、その他全ての項目の平均値が上昇していた。

さらに、「外国語活動が好きです」という項目の「その理由」の自由記述を、授業前後で比較した（表10）。

表 9 授業前後の平均値と SD および t 検定の結果

	授業前		授業後		t 値
	M	SD	M	SD	
英語のゲームをすること	3.84	0.37	3.84	0.42	0.00
日本語と英語の違いを知ること	3.31	0.70	3.53	0.59	-2.12 *
英語で歌ったりチャンツを言ったりすること	3.42	0.62	3.56	0.62	-1.23
英語で会話をする(友達と、先生と、外国人の先生と)	3.29	0.82	3.44	0.59	-1.31
英語で友達や先生などの人の意見を聞くこと	3.11	0.75	3.29	0.66	-1.60
英語で自分のことや意見を言うこと	3.16	0.82	3.20	0.73	-0.422

* p < .05

表 10 授業前後における児童が外国語活動を好きな理由とその変化 (一部抜粋)

授業前	授業後
知識的な理解の質の変化	
週に一回しかないからあきないし、ノートに書くことがないから楽しい時もある	よくわかるようになったから
ゲームをしたり、会話や歌ったりして楽しく覚えらるから	ゲームが楽しいし、英語がわかるとうれしいから
英語を習っていて、その復習という感じでできて楽しいから	難しい単語でも、工夫すればよくわかって楽しいから
外国語は楽しいし、わかると気持ちがいいから	英語が言えるようになると楽しいし嬉しいから
もっといろいろな英語について知りたいし、話せるようになるのがうれしいから	知らない言葉が分かったりしてうれしいし、話せるとかっこいいから
英語が分かるようになって楽しいから	いろんな言葉を学んで楽しいから
異文化への関心への変化	
外国の言葉がおもしろいから	外国のいろいろなことがわかるから
5年生の時にぜんぜんやってないのでちょっと苦手だから	いろいろな外国語がわかるし楽しいし面白いから
自己紹介などが英語で言えたりするとうれしいから。先生と会話したりするのが楽しいから	外国のことが知れるから
楽しく英語を学べるから	他国のことがわかるから
友達との関連性への変化	
英語を覚えるのが楽しいし、これからのためになるから	英語を友達と言ひ合うのが楽しい
覚えたりするのは難しいが、うまく言えたりするときに楽しい	覚えるのも楽しいし、友達とそれを使うのも楽しい
英語で発音するときにうまく言えたりするとうれしかったりするから好き	発音がわからない英語が友達と協力してわかるようになる

児童の記述の分類を試みた結果、変化の質として「知識的な理解」、「異文化への関心」、「友達との関係性」という3グループに分けることがで

きた。ある児童は授業前に、外国語活動に対し「週に一回しかないからあきないし、ノートに書くことがないから楽しい時もある」と答えていたが、授業後に「よくわかるようになった」と回答し、知識的な理解の質の変化が見られた。また別の感想でこの児童は、「言葉が言えるようになって楽しかったし、みんなも笑顔で楽しそうだった」と回答した。異文化への関心や友達との関係性を好きな理由に挙げている児童の人数は少なかったのだが、書かれている内容から推察すると、授業者が異文化への関心や友達との関連性への児童の意識変化を視点に入れた授業を展開することで、知識や技術面だけではない児童への働きかけが増加し、結果、児童の学習の幅を広げ、学びを深めていくと考えられる。

今回の研究において、児童に行ったアンケート結果では、授業前の時点で既に外国語活動に対して非常に肯定的な数値を示しており、授業後の上昇を数値的に調査することは難しかった。しかし、統計学的な有意差は見られなかったものの、授業前の時点で高かった平均値が、授業後ほぼ全ての項目において上昇したことから、本研究での授業実践の効果はあったのではないかと推測する。

以上のことから、外国語活動の目標を達成する授業は、外国語活動に関する児童の意識を肯定的に変化させると共に、学級集団を形成する一助となることが示唆された。

V まとめと課題

本研究を通して以下のことが明らかとなった。

(1) 児童の多くは外国語活動を肯定的に捉えている (2) 学年が上がると歌やチャンツの楽しさよりも、友達とのやりとりや、文化的な違いを知ることによって楽しさを感じたりしている (3) 女子児童のほうが男子児童よりも、歌を歌うことや人の意見を聞くということに楽しさを見出している (4) 外国語活動に関する意識は学校間の違い<学年による違い<性別の違いとなるほど差が大きい (5) 外国語活動と Q-U の間には相関がある (6) 外国語活動の目標を達成する授業は外国語活動に関する児童の意識を肯定的に変化させ、よりよい学級集団を形成する一助となる (7) 知識や技術面だけではない児童への働きかけが児童の学習の幅を広げて学びを深めていく。

外国語活動に関する意識と共に Q-U の項目に

についても肯定的な変化が見られたことから、外国語活動の授業において Q-U との関連を視点に取り入れた授業研究という新たな指針を示したと考える。

今後の課題として、以下の3点が考えられる。1点目は、「外国語活動と Q-U との関連性の広がり」である。Q-U との関連性を視点に取り入れて授業構想をし、実践することが有効だとわかったが、今回は6年生の1単元を中心に組み組んだ結果である。他の単元においても、それぞれの内容に応じた Q-U との関連性が予想される。更に、その実践を年間通じて積み上げていくことで、その関連性は更に深まっていくと考えられる。3年生から外国語活動が始まることも視野に入れると、本研究における視点を、他単元や他学年にまで広げて取り組むことが今後必要であると考えられる。

2点目は、「実践した授業内容の更なる充実」である。具体的に述べると、第2時のすごろくにビンゴのゲーム性を取り入れようとしたが、授業を行う中で児童の混乱を感じたため実施しなかった。児童の実態をより事前から理解しておく必要がある。また、第3時のシチュエーション練習は、より児童の生活により密着した内容を考える余地がある。同様に第3時、フレーズ練習で使用した画面を参考に行きたい国を伝え合う活動を行ったのだが、提示がなくてもできるように取り組めば、さらに児童の学びは深まったと考える。

3点目は、「教科・活動の枠を超えた取り組み」である。小学校の特性として、学級担任がほとんどの教科を指導する上、授業時間だけでなく、休み時間、給食時間、掃除時間や放課後までと長い時間を児童と共に過ごすことが挙げられる。そのため、学級運営に影響を与える要因は数限りない。また、Q-U の変化は外国語活動以外の要素も考えられることも忘れてはならない。本研究においても、他の授業や活動等が授業後に調査した Q-U の項目に影響を与えている可能性も否めない。このことから、外国語活動はもちろん、今後は本研究で取り入れた視点を、他教科・他活動にも広げながら継続的に取り組む必要があるのではないだろうか。

学級運営の中で、学級集団や児童の意識は刻々と変化していく。児童の変化に対応しながら授業を行っていくため、その教科指導の知識や技術を高めていくためには、教員間の連携が不可欠であ

ろう。Clair (1995) は、ESL (English as a Second Language : 第2言語としての英語) の生徒と一般的な教員との関係や指導について、教員同士が短時間でも話し合い、研修し合う必要があるとし、教員が短絡的な解決方法を求めることが問題であると述べている。教員同士で協力し合いながら自主的に日々の実践に取り組んでいく姿勢が必要であると考えられる。多くの教員と連携を図りながら、本研究において実践したことを継続して取り組んでいきたい。

【謝辞】

本研究の取り組みにあたり、ご指導いただいた大谷みどり先生、香川奈緒美先生、川路澄人先生、島根大学の関係者の皆様、また、ご協力いただいた小学校・中学校の皆様に、心から感謝の気持ちとお礼を申し上げます。

<引用・参考文献>

- Clair, N(1995). *Mainstream classroom teachers and ESL students*. TESOL Quarterly, Volume 29, Issue 1, 189-196.
- 泉恵子 (2013) 『関連分野から見る外国語活動の意義と方向性』, 樋口忠彦 (代表) 『小学校英語教育入門』研究社, 23, 15-24.
- 柿慶子・辻河昌登 (2008) 「小学生の学校ライフサイクルに関する臨床心理学的研究」学校教育学研究, 第20巻, 9-17
- 金森強 (2011) 『小学校外国語活動成功させる55の秘訣』成美堂.
- 河村茂雄 (2004) 『Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイドー小学校編一』図書文化社.
- 河村茂雄 (2012) 『学級集団づくりのゼロ段階一学級経営力を高めるQ-U式学級集団づくり入門』図書文化社.
- 河村茂雄 (2014) 『hyper-QU, Q-U コンピュータ診断資料の見方・生かし方』図書文化社.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2005) 「学級運営等の在り方についての調査研究」
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/unei.pdf>
閲覧日:平成27年1月23日.
- 國枝幹子・古橋啓介 (2006) 「児童期における友人関係の発達」福岡県立大学人間社会学部紀要, Vol.15, No.1, 105-118.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社.
- 直山木綿子 (2013) 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』東京書籍.
- 直山木綿子 (2014) 『小学校における外国語教育のこれまでと、これから』学校教育, No.1161, 5月号, 広島大学付属小学校学校教育研究会, 6-13.